

(第二章)

二無我を要約して示す>行き来の行為と行為するものを考察して人(ブトガラ)に本性を否定する>章の著述を説く>
詳細に説く>業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>業を考察して否定する>

[三つの道において行為を共通に否定する]

言う。「君が『生じる』は無いというこの正理を、(教えに)後続して良く示したので、我が心に、空性について聴聞することは素晴らしく、精髓を持つものであると思わしめたが、如何様に世間の現前である「行き来」が不合理であるのかを、更に述べたまえ。」

説く。

先ず、過ぎた(道)に行くことは無く、
過ぎていない(道)をも行くことは無い。

ここで、もし行くことが有るとなれば、それは過ぎた(道)においてか? 過ぎていない(道)に有るとなるか? と問えば。

そこで先ず、過ぎた(道)に行くことはない。(何故ならば)行く行為は、既に過去である故である。過ぎていない(道)をも行くことはない。(何故ならば)行く行為を始めていない故である。

言う。「それはその通りだ。過ぎた(道)と過ぎていない(道)に行くことは、勿論無いだろう。しかし、歩む(道)に『行く』は有る。」

説く。

過ぎたと過ぎていない(道)以外に、
歩む(道)を知るとはならない。 1

過ぎた(道)と過ぎていない(道)以外に、歩む(道)とは何があろうか。知るとはならないだろう。如何様にといえば、このように「知るとはならないだろう。」とは、「認識されるものとして無いので」といい、「合理ではない。」という主旨である。そのように、何故ならば、過ぎた(道)と過ぎていない(道)以外に歩む(道)は認識されるものとして無いのみ—不合理であるそれ故に、無いのみであるので、「行く(行為)」は無い。

業を考察して否定する>「歩く」において行為を特別に否定する> [対論者を置く]

言う。「歩むのみであり、それに『行く (行為)』は有る。如何様にといえば、

何処かへ動くことがそこへ行くことであり、
それも或るものの歩みにおいて、
動きは過ぎたのではなく、過ぎていないのではない。
それ故に、歩むに「行く」はある。 2

ここで、君の『行く (行為) が無い理由』として、既に過ぎた『行く行為』と、始めていない『行く行為』を示した故に、

『何処かへ動くことがそこへ行くことであり、』
というこれが挙げられるだろう。それも、或るものの歩みにその動作が認められれば、である。『或るもの』とは、『行く者』という主旨である。そのように、何故ならば動作は『過ぎた (道)』には無く、『過ぎていない (道)』にも無いが、『歩む (道)』には有る故に、動作が有るそこに、『行く (行為)』は有る。そのように『行く (行為)』が有るので、『歩む』に『行く (行為)』は有る。」

「歩く」において行為を特別に否定する>それを否定する正理>

[対象を表す言葉と行為を表す言葉において、一方に意味があればもう一方に意味が欠如する]

説く。

「歩む」に「行く」が有るとは、
如何様であれば合理となろうか。
「行く」が無い時、
「歩む」に合理は無い故である。 3

ここで君は、「行く (行為)」を具えるので「歩む」であると主張するが、「そこに『行く (行為)』がある。」と言うならば、ここに行く行為はただ一つしかない。しかしそれは「歩む」というそれに良く付随しているので、それ故に「行く」というそれは行く行為とは離れたことによって、「行く (行為)」が無いという背理になる。それも不合理であり、このように「行く (行為)」無く、如何様に行くとなろうか。そこで、「行く」というそれが行く行為と離れたことによって不合理となる時、「歩む」に「行く (行為)」が有ると如何様に合理となろうか。

また他にも、説く。

某の主張では「歩む」に「行く」が有るという。
 その「歩む」には、「行く」が無いという
 背理となる。何故ならば、
 「歩む」を理解する故である。 4

某の考察において『その過失となつてはいけない。』と思い、「歩む（道）を
 行く」という言葉のうち「行く」というそれが「行く（行為）」を具えるので
 「行く」であると思惟する。それにも「行く（行為）」は「行く」というそれに
 当てはめるので、「歩む」には「行く（行為）」が無く、「行く（行為）」と離れ
 た、村や街のようになる背理となる。例えば「村は行く」という如く、「歩む」
 も（「歩むが行く」となる）背理となるので、それも主張しない。それ故に、『歩
 む』に『行く』が有る。」ということは、如何様にも不合理である。

それを否定する正理> [両方に意味があれば、途方もない背理となる]

『何。その過失になつてはいけない。』と思い、『〈行く〉というそれと〈歩む〉
 というその二つとも、〈行く（行為）〉を具える』と思えば。

それにはこの過失が有り、説く。

「歩む」に「行く」が有るならば、
 「行く」が二つになる背理となろう。
 その「歩み」というそれと、
 それを行くというものである。 5

「行く（行為）」を具える「歩む」を、「行く」であると考察すれば、「行く（行
 為）」が二つになる背理となる。「行く（行為）」を具えるので「歩む」となるも
 のと、「それを行く」という、第二番目の「行く（行為）」と考えられるもので
 ある。「行く（行為）」が二つであるとは主張しないので、それ故に、それも不
 合理である。

それに、他のこの過失も有り、説く。

「行く」が二つになる背理となれば、
 行く者もまた二人となる。
 何故ならば、行く者が無ければ、

「行く」は合理とはならない故に。 6

「行く（行為）」が二つになる背理となれば、「行く者」も二人になる背理となる。「何故か」といえば、

「何故ならば、行く者が無ければ、『行く』は合理とはならない故に。」

何故ならば、「行く者」が有れば「行く（行為）」も有るが、「行く者」を捨て去れば「行く（行為）」も無い故に、「行く（行為）」が二つになる背理となれば、「行く者」も二人になる背理となるので、それも主張しない。それ故に、そのように多くの過失が有るので、「歩む」に「行く（行為）」はまさしく無いのである。

何故ならば、過ぎた（道）と、過ぎていない（道）と、歩む（道）において「行く（行為）」は不合理である故に、「行く」は無いのみである。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>行為者を考察して否定する>

[行く者が行く（行為）の拠所として有ることを否定する]

ここで言う。「過ぎた（道）と、過ぎていない（道）と、歩む（道）に『行く（行為）』は不合理であったとしようが、『行く者』に依拠した『行く（行為）』はまさしく有る。（何故ならば）このように、『行く者』に『行く（行為）』を認める故である。」

説く。

もし、行く者が無くなれば、
「行く」は合理ではなくなる。

「行く者」が無くなれば、「行く（行為）」が合理とならないとは、既に前述した。

もし、「行く者」が無くなれば「行く（行為）」が合理とならないならば、「行く者」に依拠して「行く者」に当たる、その「行く（行為）」とは何であるか。

言う。『行く者』に当たる、『行く者』より別となった他の『行く（行為）』が有るとは言わない。このように、『〈行く（行為）〉であるものを具えるので〈行く者〉となる、それが有る。』と言うのだ。」

これに説く。

「行く」が無ければ、行く者が、
まさしく有ると、何処でなろうか。 7

もし、拠所が僅かにも無い「行く（行為）」が良く成立したとなれば、それを「行く者」か「行く者でない者」が具えるかとも問われようが、拠所の無い別となった「行く（行為）」は何も無い。然れば、別として成立した「行く（行為）」が無いところに、君が主張する『行く（行為）』を具えるので『行く者』となる」ことがまさしく有ると、何処でなろうか。「行く者」が無いとしても、誰の「行く（行為）」となろうか。然れば、「行く（行為）」は無い。

行為者を考察して否定する＞ [三種の人において、行く（行為）を一般的に否定する]

言う。「この戯論が何をしようか。『何かに相互関係して行く。』というそれが、『行く（行為）』なのだ。」

これに説く。もし、「行く者」というまさしくそれが良く成立したとなれば、然れば「行く（行為）」も良く成立するとなろうが、それは良く成立しないので、「行く（行為）」が良く成立すると、何処でなろうか。

「如何様に」といえば。

ここで一つの「行く（行為）」が有れば、「行く者」か「行く者でない者」の何れが行くのか？と問えば、これに説く。

先ず、行く者は行かず、
行く者でないものは行く者ではない。
行く者と行く者でない者より他の
第三の何者が行くとなろうか。 8

然れば、「行く。」というまさしくそれは成立しない。「何故に」といえば、不合理である故である。

行為者を考察して否定する＞ [行く者に行く行為を個別に否定する]

「如何様に」といえば。

先ず、「行く者が行く。」とは、
如何様に合理であるとなろうか。
「行く」が無ければ、行く者は
如何なる時も、合理とはならない。 9

ここで「行く者が行く。」という言葉において、一つだけ有るその「行く行為」は、「行く。」というその言葉に該当するので、然れば「行く者」は「行く（行為）」と離れ、グプタとツェトラの如くただの名称のみとなった背理となるので、それも主張しない。それ故に、「行く（行為）」が無ければ「行く者」は如何なる時も合理にはならない時、「行く者が行く。」というそれは、如何にまさしく合理であるとなろうか。

また他にも、説く。

或る説では、「行く者が
行く」という。それには、「行く」の無い
行く者である背理となる。
行く者が行くと主張する故である。 10

或る説においては、『その過失となつてはいけない。』と思ひ、『〈行く者〉は〈行く（行為）〉を具えるので〈行く者〉である』と思ひ、そこでも「行く者」というそれに行く行為を該当させたので、「行く」の無い「行く者」である背理となる。（何故ならば）「行く者」が「行く」であると主張する故に、『行くこと無く行く。』という背理になるだろう。」という主旨である。それは不合理であり、「行く。」というそれは「行く（行為）」が無いと、如何様になろうか。

『何と。その過失となつてはいけない。』と思ひ、『行く者』というものと、『行く。』というその二つとも、『行く（行為）』を具える。」といえは。

それにもこの過失があり、説く。

もし行く者が行くとなれば、
「行く」が二つになる背理となる。
それによつて行く者として現れるものと、
行く者となつてから、行くことである。 11

「行く（行為）」を具えた「行く者」を、「行く」であると考察したならば、「行く（行為）」が二つになる背理となる。或る「行く（行為）」を具えることで「行く者」と顕現されるものと、それが行くことに相応して「行く。」となるものである。「行く（行為）」が二つであるとは不合理であり、「行く（行為）」が二つになる背理となれば、前述の如く「行く者」も二人になる背理となるので、そ

れも主張しない。そう見るので、「行く者が行く。」というそれは不合理である。

ここで、「行く者でない者」も行かない。「行く者が行く。」というそれが不合理である時、『行く（行為）』と離れた、行く者ではない者も、行く。」というそれが、如何様に合理であるとなろうか。そう見れば、「行く者でない者」も行かない。

そこでこう、『行く者であり行く者でない者が、行く』と思えば。

説く。「行く者と行く者でない者より他の、第三の何者が行くとなろうか。」

行く者と行く者ではない者より他の第三の者、「行く者であり行く者ではない者である何者かが、行く。」ということが合理であるとは、何だ。そう見れば、無いのみであるので、行く者であり行く者ではない者も行かない。

そのように、「行く者と、行く者ではない者と、行く者であり行く者ではない者が行く。」ということは不合理である故に、「行く。」というそれは全く成立しない。「行く。」というそれが無ければ、「行く（行為）」が良く成立すると、何処でなろうか。

ここで言う。『行く者と、行く者であり行く者でない者が行く。』ということ是不合理であったとしても、『グプタは行く。』『ツェトラは行く。』というそこに、『行く。』とは合理である。」

説く。それによって、何も言ったことにはならない。グプタに依拠したならば、「グプタが行く者になって行くのか、あるいは行く者ではない者が行くのか、あるいは行く者であり行く者ではない者が行くのか」というこれを、明らかにしなかったか。そう見れば、これは凡々である。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する>行為が有る理由を否定する>[最初の始まりが有ることを否定する]

ここで言う。『行く（行為）』とは、有るのみである。何故かといえば、行く行為を始めることが有る故である。ここで、『過ぎたと、過ぎていないと、歩むに行く（行為）が有る』ということ述べることができなくなったけれど、居ることより行くその時には、居る行為が過去となるや否や行く行為に入ることになるので、そう見れば行為を始めることが有るので、『行く（行為）』は有るのみである。」

説く。何？君は、他の名前に変えられたので心が蒙昧となり、我が子が分からないのか？君はまさしくその意味を、後の心が他の言葉によって述べたのだ。

行く行為の始めが有ると尽く考察されるそれも、過ぎた（道）か、過ぎていない（道）か、歩む（道）に有るのか？と問えば、それに対して、まさしく前述した理由によって説く。

過ぎた（道）に「行く」の始めは無く、

何故かといえば、行く行為は既に過ぎてしまった故である。

過ぎていない（道）にも「行く」の始めは無い。

何故かといえば、行く行為を始めていない故である。

歩む（道）に始めが有るのでなければ、

何故かといえば、「歩む」が無い故と、「行く（行為）」が二つになる背理となる故と、「行く者」が二人になる背理となる故である。

何処で「行く」を始めようか。 12

という返答を、ここでしたまえ。そう見るので、「行く（行為）」の始めは無い。始めが無ければ、「行く（行為）」が有ると、何処でなろうか。

行為が有る理由を否定する＞ [行く所である道が有ることを否定する]

ここで言う。『行く（行為）』とは有るのみである。何故かといえば、『歩む』と『過ぎた』と『過ぎていない』は有る故であり、何故ならば『行く（行為）』を具える為に『歩む』というのであるが、『行く（行為）』が完遂したならば『過ぎた』という。行く行為が過ぎていないことに相互関係して『過ぎていない』というので、そう見れば『歩む』と『過ぎた』と『過ぎていない』は有る故に、『行く（行為）』は有る。」

説く。何？君はこの虚空で起き上がろうとして揺さぶるのか？ある時、

「行く」を始める以前に、
何処で「行く」を始めるとなろうか。
歩む（道に）は無く、過ぎた（道に）は無い。

ここで、「行く（行為）」を始める以前に居るとなれば、ある所で「行く（行為）」を始めるとなる「歩む（道の様相）」も無く、「過ぎた（道の様相）」も無い。「行く（行為）」の始めが無ければ、「歩む」が「行く（行為）」を具えると、何処でなろうか。「行く（行為）」を具えることが無ければ、完遂した「行く（行為）」が有るとも、何処でなろうか。

ここで言う。「『過ぎていない（道の様相）』は有る。そこで『行く（行為）』を始めるとなる。」

説く。

過ぎていない（道）を行くことが何処にあろうか。 13

ここに居り、動かさないものは「過ぎていない」—それにおいて、始めは無い。動かす時に、ある機会において動かすことは「過ぎていない」ではない。その時、過ぎていない機会であるそこに、動かすことは無い。そう見れば、「過ぎていない（道の様相）」において「行く（行為）」の始めが何処にあろうか。

そのように考察したならば、

「行く」の始まりが一切の様相において、
現れることがまさしく無いならば、
過ぎたとは何であるか？歩むとは何であるか？
過ぎていないとは何であるか？ 尽く考察したまえ 14

そのように、一切の様相によって尽く考察したならば、「行く（行為）」の始めがまさしく現れない時、「君の『過ぎた』も何であるか？『歩む』も何であるか？その『過ぎていない』も何であるか？」と、尽く考察したまえ。

言う。「先ず、『過ぎていない』は有る。」

説く。何？君は子供が生まれていないのに、（その子供が）死ぬことを苦しむのか？君は「過ぎた」が無くして「過ぎていない」を考察している。このように、「過ぎた」に対応するものは「過ぎていない」であるならば、そこでもし、「過ぎた」そのものが無ければ、君の「過ぎていない」が有ると何処でなろうか。

行為が有る理由を否定する> [行く (行為の) 対処が有ることを否定する]

言う。「もし、対処が無いので『過ぎた』が無いならば、では『行く (行為)』を成立させよう。何故にといえ、合致しないものが有る故であり、このように『行く (行為)』に合致しない『居る』が有り、然れば、不合致が有る故に『行く (行為)』は有るのみである。」

説く。もし「居る」が有るならば「行く (行為)」も有るとなるのか？と問えば、「居る」は不合理であるので、「行く (行為)」が有ると何処でなろうか。

「如何様に」といえば。

ここでもし「居る」が有るとなれば、「行く者」の (居る) か？「行く者ではない者」の (居る) であるか？と問えば、そこで、

先ず、行く者は居らず、
行く者でない者は居るのではない。
行く者と行く者でないものより他の、
第三の何が居るとなろうか。 15

そう見るので、「居る」は無いのみである。何故かといえ、不合理である故である。

「如何様に」といえば。

説く。

先ず、「行く者が居る。」とは、
如何様に合理となろうか。
「行く」が無ければ、行く者は
いつ時も合理とはならない。 16

ここで、「行く (行為)」を具えるので「行く者」となるので、「行く (行為)」が無ければ、「行く者」であるとはまさしく不合理である。「行く (行為)」を止めることを「居る」というならば、「行く」と「居る」という合致しない二つが一つ (の基体) に一緒に存在することは無い。それ故に、そのように先ず、「行く者が居る。」というそれが、如何様に合理となろうか。

そこで、「行く者でない者」も居らず、何故かといえば、「行く（行為）」が無い故である。ここで、「行く（行為）」を止めることを「居る」というならば、「行く者でない者」とは「行く（行為）」と離れた故にまさしく「居る」であるので、そこで再び「居る」が何をしようか。その「居る」において、再び居ると考察すれば、「居る」が二つになる背理となることと、「居る者」も二人になる背理となるので、それ故に「行く者でない者」も居ない。

そこでこう、『行く者であり行く者でない者が、居る』と思惟すれば。

説く。

「行く者と行く者でないものより他の、第三の何が居るとなろうか。」

「行く者」と「行く者でない者」より他の第三番目である『行く者であり行く者でない者』が居る。」と考察したそれは、何であろうか。そう見るので、無いのみである故に、「行く者であり行く者でない者」も居ない。

行為が有る理由を否定する> [最後の止まることを否定する]

また他にも、「行く（行為）」を止めることを「居る」というならば、その「居る」も、「歩む」より（止まるの）か？「過ぎた」より（止まるの）か？過ぎていないより止まるとなるのか？と問えば、そこで、

歩む（道）から止まるとならず、
過ぎた（道）と、過ぎていない（道）からでもない。

「歩む」より居ることにはならない。何故かといえば、このように「行く（行為）」を具える故に「歩む」であるが、「行く（行為）」を止めることが「居る」であるので、「居る」と「行く」の合致しないその二つが、一つ（の基体）にはあり得ないので、それ故に先ず、「歩む」より止まるとはならない。

ここで、「過ぎた」と「過ぎていない」よりも居るとはならず、何故かといえば、「行く（行為）」が無い故である。このように「行く（行為）」を止めることが「居る」であれば、「行く（行為）」とは、「過ぎた」と「過ぎていない」に無く、「行く（行為）」が無ければ、「行く」が止まることが何処にあらうか。「行く」が止まることが無ければ、「居る」は何処にあらうか。そう見るので、「過ぎた」と「過ぎていない」よりも止まるとはならない。

行為が有る理由を否定する > [留まる理由を否定する]

「行く」と、「入る」と、
「止まる」も、「行く」に等しい。 17

斯くも『行く者』は居ない。(何故ならば)『居る』と『行く』の二つは合致しない故である。」と説かれた如く、「居る者」も行かない。(何故ならば)「居る」と「行く」の二つは合致しない故である。

斯くも『行く者でない者』は居ない。(何故ならば)『居る(行為)』が二つになる背理となる故である。」と説かれた如く、「居る者でない者」も行かない。(何故ならば)「行く(行為)」が二つになる背理となる故である。

斯くも『行く者であり行く者でない者』は居ない。(何故ならば)あり得ない故である。」と説かれた如く、「居る者であり居る者でない者」も行かない。(何故ならば)あり得ない故である。そのように先ず、『行く者』の居る」と、『居る者』の行く」は等しいのである。

ここで、斯くも『行く(行為)』の始めは『過ぎた(道)』と、『過ぎていない(道)』と、『歩む(道)』において不合理である。」と説かれた如く、「居る(行為)」に入ることも、「居た」と、「居ていない」と、「居る」において不合理であり、そう見れば、「行く(行為)」の始めと「居る(行為)」に入ることは等しいのである。

ここで、斯くも「行く(行為)」の停止が、『過ぎた(道)』と、『過ぎていない(道)』と、『歩む(道)』より止まることはない」と説かれた如く、「居る(行為)」の停止についても、居たところより行かない。(何故ならば)「行く(行為)」が無い故である。居ていないところよりも行かない。(何故ならば)「行く(行為)」が無い故である。居るところよりも行かない。(何故ならば)「居る」と「行く」の二つは合致しない故である。そのようであれば、「行く(行為)」の停止と、「居る(行為)」の停止は等しいのである。

業と行為者において、行為をそれぞれに否定する > 行為を考察して否定する >

[「行く者」と「行く(行為)」において、同一か別かと考察して否定する]

ここで言う。『行く(行為)と、入る(行為)と、止まる(行為)は、過ぎた(道)と、過ぎていない(道)と、歩む(道)に有る。』ということや、『行く者と、行く者でない者と、それより他の者に有る。』ということに対して、述べられなくなったとしても、ツェトラが歩みを進めることを見て、『ツェトラである行く者』となるので、それ故に、『行く者』と『行く(行為)』は有る。」

説く。先ず、「述べられなくなったとしても」とは、困苦の言葉である。しかしながら、それを見て『行く者であるツェトラ』と思う、ツェトラの「歩み」を進めることにおいて、「歩みを進める」とツェトラはまさしく同一となるか？あるいはまさしく他となるか？と問えば、そこで、

その「行く」と行く者は、
そのものであるとも適わない。
「行く」と行く者は、
まさしく他であるとも適わない。 18

「如何様に」といえば、

もし、「行く」であるもの、
そのものが行く者であるとなれば、
行為者と行為そのものも、
全く同一になる背理となる。 19

もし、「行く（行為）」であるまさしくそれが「行く者」であるとなれば、そう見ると、行為者と行為もまさしく同一である背理となるだろう。それは不合理である。行為者であるまさしくそれが、行為であると如何様になろうか。

『何と。その過失になってはいけない。』と思い、「行為者と行為の二つは、まさしく他である。」といえは。

それに説こう。

もし、「行く」と行く者が、
まさしく他であると尽く考察すれば、
行く者の無い「行く」と、
「行く」の無い行く者となろう。 20

もし、行為者と行為の二つがまさしく同一であるという過失が見られるので、行為者と行為はまさしく他であると尽く考察するならば、そう見れば、「行く者」より別となった、拠所の無い「行く（行為）」が自らより良く成立したとすることと、拠所の無い「行く（行為）」が自らより良く成立したとなれば、「行く者」も「行く（行為）」と離れ相互関係せず、自らより良く成立したとなるものであ

るが、その二つの何れも不合理である。「行く者」無くしての「行く（行為）」や、「行く（行為）」無くして「行く者」であると、如何様になろうか。

ここで言う。「何？君は殺し屋自身に力を与えるのか？吾輩は、行為者と行為の二つは別であると成立したことは無い故に、まさしく他であるとも主張しない。しかし、『行為者』は（行為と）別である故にまさしく同一であるとも主張しないので、それ故に、その二つとも無くとも、その二つは成立する。」

説く。吾輩は、殺し屋自身に力を与えることは無いけれど、まさしく君は腕を伸ばして、大変な苦勞をして手招きし、息を切らせながら幻の川を泳ぎ渡ろうとするのか？君は、まさしくそれ（自）か他以外の、無い方向に有るという心で留まっている。

まさしく同一事物か、
まさしく他事物として、
成立したものが有るのでなければ、
その二つが成立したとは如何様に有ろうか。 21

もし、行為者と行為の二つが、まさしく同一か他として成立したことが無ければ、その二つ以外に他の如何なる様相によって、その二つが成立したことが有るかを、更に述べたまえ。そう見れば、それはただの考察にすぎない。

行為を考察して否定する＞ [「行く者」とする行為に、第二の行為の有無を考察して否定する]

ここで言う。「世間に顕かなこの意味を隠しながら押さえつけることを、どうしてできようか？『その存在が無いので、行く者ではない。』や、『それに相互関係して、この者は行く者である。』というそれが『行く（行為）』であるが、それもまた、『行く者』という。」

説く。何。君は子供が欲しくて両性者に近づくのか？君は「行く者」が無いものを「行く者」であると考えている。このように、去る一所が有るならば「行く者」であると考察されることも疑い得るが、「行く者」であると考察しても去る所が不合理となるその時、この何の役にも立たない詳細な考察によって、何をするのか。

去る所が如何様に不合理であるのかといえば、それは「過ぎた」でもなく、「過ぎていない」でもないが、

「歩む（道）を知るとはならない。」¹

と既に示した。それらだけのこととしてそれは行くので「行く者」であるのか？と問えば、それは行かないので、それ故に、「行く者」であると考察したことは無意味である。

ここで言う。『行く者』なので、『行く』そのものに行く。例えば『言説者達の誰かが、言葉を言う。』『行為をする。』というが如くである。

説く。「行く者」の「行く」について考察するとしても、その「行く」によってその「行く者」であると顕かにする「行く」そのもの（が行くの）か？それより他のものに行くのか？と問えば、（その）二つとも見られない。如何様にと
いえば、

或る「行く」の行く者であると顕かになる、
その「行く」は、行くのではない。

或る「行く」を具えれば、「行く者であるツェトラ」と顕かなその「行く」は、その「行く者」を行かせるのではない。何故かといえば、

何故ならば、「行く」の以前には無い。
何が何処へ行くとなろうか。 22

何故ならば、或る「行く（行為）」によって「行く者」であると顕かなこの「行く（行為）」の以前とは、行く以前であり、その以前には「行く者」は無い。それを具えるのみの理由で「行く者」と述べられるのであり、何かは何処かへ、例えば村や街のように別になったので行くとなるのだけれど、「行く者」になってから、行くことになるその「行く（行為）」は、「行く者」から「村」や「街」のように別になったことは無い。そのように先ず、或る「行く（行為）」によって「行く者」であると顕かになるその「行く（行為）」は、「行く者」を行かせるのではない。

そこでこう、『それより他のものに行く』と思えば。

説く。

¹ 「歩む…ない。」：『根本中論』第2章1偈4行目。

或る「行く」によって、行く者であると顕かになる、
それより他のものが行くのではない。

或る「行く (行為)」を具えるならば「行く者であるツェトラ」と顕かにする、
それより他の「行く (行為)」も、その「行く者」を行かせるのではない。何故
かといえは、

何故ならば、一人だけの行く者において、
「行く」が二つとは不合理である 23

何故ならば、一人だけの「行く者」に、それによって「行く者」と顕かにす
る (行く行為) と、「行く者」になってから行くことになる (行く行為) の、二
つの「行く (行為)」は不合理である故に、それより他の「行く (行為)」も、「行
く者」を行かせるのではない。

然れば、「言葉を言う。」「行為をする。」というものにも、返答したのである。

ここで言う。『行く者』の去る所である村や街等は有るのではないのか？」

説く。それについては、既に返答した。村や街に依拠して、それは村へ「過
ぎた (ところ)」に「行く (行為)」が有るのか？「過ぎていない (ところ)」に
「行く (行為)」が有るのか？「歩む (ところ)」に「行く (行為)」が有るのか？
と既に思索したので、それ故に、それも凡々である。

詳細に説く > [業と行為者において、行為を共通に否定する]

また他にも、

行く者であるとなった者は、
三様相の「行く」を、行くことをしない。
そうではないとなった者も、
三様相の「行く」を、行くことをしない。 24

そうであり、そうではないとなった者も、
三様相の「行く」を、行くことをしない。
それ故に、「行く」と行く者と、
行かれるもの (道) も、有るのではない。 25

「行く者であるとなった」とは、「行く（行為）」を具える「行く者」である。「そうではないとなった者も」とは、「行く（行為）」と離れた「行く者」である。「そうであり、そうではないとなった者も」とは、「行く（行為）」を具えるのでもあり、「行く（行為）」と離れるのでもある「行く者」である。「行く」²とは、「行かれる所」という主旨である。「三様相を」とは、「過ぎた（道）を」と、「過ぎていない（道）を」と、「歩む（道）を」とである。それ故に、そのように、正しく導かれた知恵によって尽く考察したならば、「行く者であるとなった者」は三様相の行かれるもの（道）を行くことをしないが、「行く者ではないとなった者」も三様相の行かれるもの（道）を行くことをせず、「行く者であり行く者ではないとなった者」も三様相の行かれるもの（道）を行くことをしない、

章の著述を説く > [まとめ]

それ故に、「行く（行為）」と「行く者」と「行かれるもの（道）」は無い。

諸々の行為の中で行く行為が主要であるので、行く行為を尽く考察し、斯様に「行く（行為）」は不合理であると良く論証するが如く、一切の行為も不合理であると成立した。

行き来の行為と行為するものを考察して人（プトガラ）に本性を否定する > [章の名を示す]

『過ぎた』と『過ぎていない』と『歩む』を考察する」という、第二章である。

DECHEN 訳

² 「行く」：『根本中論』第2章 24偈 4行目「三様相の『行く』を、…」の「行く」。